A-3　中国語の動詞重複分裂文における ROOT 移動仮説

筑波大学大学院生　胡　亜敏

１．はじめに

中国語では、(1) に示すように動詞が重複して生起する動詞重複分裂文が見られる（以下、前の動詞を V_1、後ろの動詞を V_2 と呼ぶ)。

(1) [Topic 吃], 我 是 [Focus 吃过], 不过,…
　　食べる 私 cop 食べ- exp しかし
　「私は食べることは食べたが…」

この構文に対して、Cheng (2008)は「吃」は主題だと主張しており、また、Cheng & Vicente(2013)は、動詞重複のメカニズムとして、動詞そのものが文頭の TopP の指定部に移動して生成されたものであると論じている。

本発表は、まず、Tsao(1987)の分析に基づき、Cheng & Vicente(2013)の動詞移動分析の問題点を指摘する。そして、ROOT 移動仮説という新たなアプローチを提案し、動詞重複のメカニズムを検討する。

２．先行研究

Cheng & Vicente (2013)は、以下の二つの根拠に基づいて動詞そのものが移動すると主張している。

・動詞重複は「島の制約」(island constraint)に従わねばならない。

(2) *吃, ［他 是 已经 吃了 以后］, 我 才 回到 家 不过…
　　食べる 彼 cop もう 食べ-perf 以後 私 そのときに 帰る 家 しかし…
　「食べることは, 彼がすでに食べた後で, 私は家に帰ったが…」（Cheng & Vicente2013：8　訳筆者）

(2) は、「付加詞制約」が適用され、付加詞の中から要素を取り出して移動することができないことを示している。

・文の中に現れる二つの動詞が同一でなければならない。

(3) a. *旅行, 我 是 ［坐过］ 飞机
　　旅行 私 cop 乗る-exp 飛行機
　　「旅行することに関して, 私は飛行機に乗ったことがある.」
　b. *煮菜, 我 是 ［烤过］ 鸡
　　料理を作る 私 cop 焼く-exp チキン
　　「料理を作ることに関して, 私はチキンを焼いたことがある.」 (Cheng & Vicente2013：9)

Cheng & Vicente (2013)による動詞重複のメカニズムでは、動詞そのものが移動し、元位置に複製されたコピーが発音されるため、V_1 と V_2 は同一でなければならないと論じている。したがって、(3) のように、動詞が同一でないと、非文になってしまう。

以上の事実は、動詞重複分裂文における二つの動詞が移動によって生成されることを示している。

Cheng & Vicente(2013)の分析に従うと、動詞移動の際には、移動する要素と元位置に残された要素は必ず対応するという性質を持たなければならない。しかしながら、Tsao(1987)では、(4) のような副詞が文末に現れる重複構文では、V_1 と V_2 は同じ形態に見えるが、V_1 は動詞性が失われた要素であり、二つの動詞の性質が異なると論じている。

(4) ［Topic 他］［Topic 看 书］ 看 了 五个小时。
　　彼 読む 本 読む perf 五時間
　「彼は本を五時間読んでいた。」 (Tsao1987: 17)

次節では、Taso(1987)の観察を概観し、動詞重複分裂文の V_1 の性質を明らかにすることで、Cheng & Vicente(2013)の問題点を示す。

３．V_1の性質

前節では、Cheng&Vicente(2013)の動詞移動分析を提示し、そのうえでV_1とV_2の性質が異なる可能性を示した。本節では、Tsao(1987)の分析を踏まえ、Cheng&Vicente(2013)の問題点を示す

3.1　Tsao(1987)

本発表で扱っている動詞重複分裂文以外に、中国語には別の動詞重複構文が存在する。それは、(5)のように、V_1が文頭ではなく、主語の後ろに現れ、文末に副詞的要素が出現する構文形式である。

(5) ［$_{Topic}$他］［$_{Topic}$看　　书］看　　了　　五个小时。　　((4) 再掲)
　　彼　　読む　本　読む　perf　　五時間
　「彼は本を五時間読んでいた。」

Tsao(1987)は（5）の主語「他」は一次的主題であり、「V_1+目的語」の連鎖「看书（本を読む)」は二次的主題であると指摘している。さらに、前の動詞V_1は脱動詞化（deverbalization）が行われており、動詞としての特性が失われていると論じた。

この主張の妥当性を検証するために、Tsaoは以下の三つの統語的特徴を挙げている。

①. アスペクトマーカー「了」「过」と共起できない

(6) a. 他　看　　书　看　　了　　五个小时。
　　彼 読む　本　読む　perf　五時間
　　「彼は本を五時間読んでいた。」
　b. *他　<u>看了</u>　书　<u>看了</u>　五个小时。
　c. *他　<u>看了</u>　书　<u>看</u>　五个小时

(7) a. 他　照　　相　　照　　过　　两次。
　　彼 撮る　写真　撮る　exp　　二回
　　「彼は写真を二回撮ったことがある。」
　b. *他　<u>照过</u>　相　<u>照过</u>　两次。
　c. *他　<u>照过</u>　相　<u>照</u>　两次。　　(Tsao1987: 17)

②. V_1に否定辞が付けられない。

(8) a. 他　上个月　打　　球　　打　　了　　三次。
　　彼　先月　　打つ　ボール　打つ　perf　三回
　　「彼は先月ボールのプレイを三回した。」
　b. 他　上个月　打　　球　　<u>没</u>　　打　　三次。
　　彼　　先月　打つ　ボール　ない　打つ　　三回
　　「彼は先月ボールのプレイを三回しなかった。」
　c. *他上个月　<u>没打</u>　球　打　三次。

(9) a. 妈妈　　挂　　衣服　挂　　在　衣架　　上。
　　お母さん　かける　洋服　かける　に　ハンガー　上
　　「お母さんは洋服をハンガーにかける。」
　b. 妈妈　　挂　　衣服　<u>不　　挂</u>　　在　衣架　　上。
　　お母さん　かける　　洋服　ない　かける　　に　ハンガー　上
　　「お母さんは洋服をハンガーにかけない。」
　c. *妈妈　<u>不挂</u>　衣服　挂　在衣架上。　　(Tsao1987: 19)

③ 単音節の副詞がV_1の前に生起できない。

(10) a. 他　念　　书　只　念　　了　　三年。
　　彼 勉強する　本　だけ　勉強する　perf　三年
　　「彼は三年しか勉強しなかった。」
　b. *他　只念　书　念　了三年。
(11) a. 他　唱　歌　还　唱　得　不　错。
　　彼　歌う　歌　程よい　歌う　de　ない　悪い
　　「彼が歌を歌うのは悪くない。」
　b. *他　还唱　歌　唱　得不错。　(Tsao1987: 20)

以上三つの統語的な性質を通して、Tsao(1987)は V_1 が動詞性を失った要素であるという分析が裏付けられるとしている。

3.2　動詞重複分裂文における V_1 の性質

Tsao(1987)の分析が、本発表で取り上げている動詞重複分裂文にも当てはまることを、同様の観察を用いて示す。

①V_1 はアスペクトマーカー「了」「过」と共起できない。

(12) a. 吃，　我　是　吃　过，　不过…
　　食べる　私　cop　食べる-exp　しかし
　　「食べることに関して、私は食べたが…」
　b. *吃　过，　我　是　吃　过，不过…
　　食べる- exp　私　cop　食べる-exp　しかし
　c. *吃　过，　我　是　吃　过，　不过…
　　食べる- exp　私　cop　食べ-exp　しかし

②V_1 に否定辞が付けられない

(13) a. 吃,　我　是　没　吃。
　　食べる　私　cop　ない　食べる
　　「食べることに関して、私は食べていない。」
　b. *没　吃,　我　是　没　吃。
　　ない　食べる　私　cop　ない　食べる
　c. *没　吃,　我　是　吃。
　　ない　食べる　私　cop　食べる

③単音節の副詞が V_1 と共起できない

(14) a. 吃，　我　是　只　吃　饭。
　　食べる　私　cop　だけ　食べる　ご飯
　　「食べることに関しては、私はご飯だけ食べるが…」
　b. *只　吃，　我　是　吃　饭。
　　だけ　食べる　私　cop　食べる　ご飯
　c. *只　吃，　我　是　只　吃　饭。
　　だけ　食べる　私　cop　だけ　食べる　ご飯

（12）～(14）で示したように、動詞重複分裂文においても、V_1 は動詞性が失われた要素だと考えられる。すなわち、動詞重複分裂文における V_1 は名詞化された要素だと言える。

また、中国語だけではなく、日本語にも動詞が文頭に生起する現象が見られる。しかし、日本語の場合は動詞が文頭の主題位置に現れる際に、「こと」「の」などのマーカーによって名詞化される。

(15) 食べる　こと/の　は食べたが…

一方で中国語では「こと」「の」のようなマーカーは存在しないため、主題位置の「動詞」は見た目では動詞として現れているものの、実際は形式が変化しないまま名詞化されていると考えられる。

この分析が正しければ、Cheng&Vicente(2013)が用いる動詞移動分析は適用できなくなる。それは、動詞そのものが移動するのであれば、V_1 と V_2 の性質が異なることは動詞移動分析の同一性制約に違反するためである。

故に、本発表では Cheng&Vicente(2013)の動詞移動分析を廃棄し、ROOT 移動仮説を導入することによって、動詞移動のメカニズムを捉え直す。次節では具体的な分析方法を提示する。

４．ROOT 移動仮説

前節の分析をまとめると、動詞重複分裂文において、V_1 は動詞として移動しているとは言えない。一方で、2 節で示した Cheng & Vicente (2013)の分析から、二つの「動詞」の間には島の制約及び同一性制約が見られるため、移動が生じていることは否定できず、基底生成の可能性が排除される。

以上の理由から、動詞重複分裂文の派生は確実に移動が関わるが、動詞そのものが移動するのではなく、別の要素が移動していると考えられる。従って、本発表は分散形態論（Distributed Morphology）の観点から新たな動詞重複メカニズムを提案する。

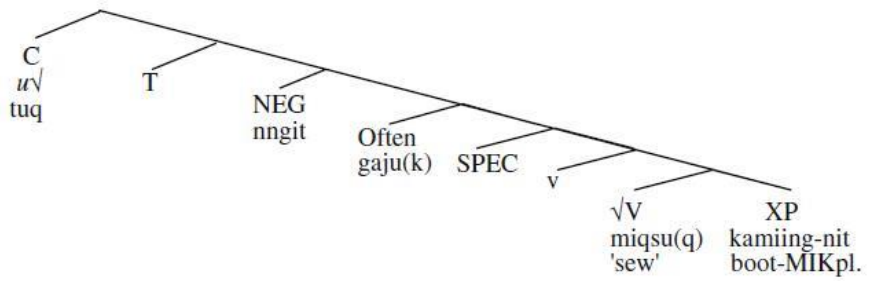
Koening&Davis(2001)は、動詞は二つの部分に構成されており、一つは little v で、否定接辞、アスペクトなどに修飾されることが可能であるのに対して、もう一つは項構造を持つ ROOT であることを指摘している。

Johns(2007)では、ROOT 移動分析を用いて、イヌクティトゥット語（Inuktitut）における制限的名詞複合語（Restricting noun incorporation）現象を説明している。具体的には、(15a-b) のように、探査子（Probe）は一種のムードとして C の位置を埋めており、u√素性を持つ Probe が何らかの√ROOT を探しているため、「√miqsu」が自動的に C に移動するという分析である。

(16) a.

miqsu-gaju-nngit-tuq	kamiing-nit
sew-often-neg.-part.3s	*boot-MIKpl.*
She hardly ever sews boots.	

b.



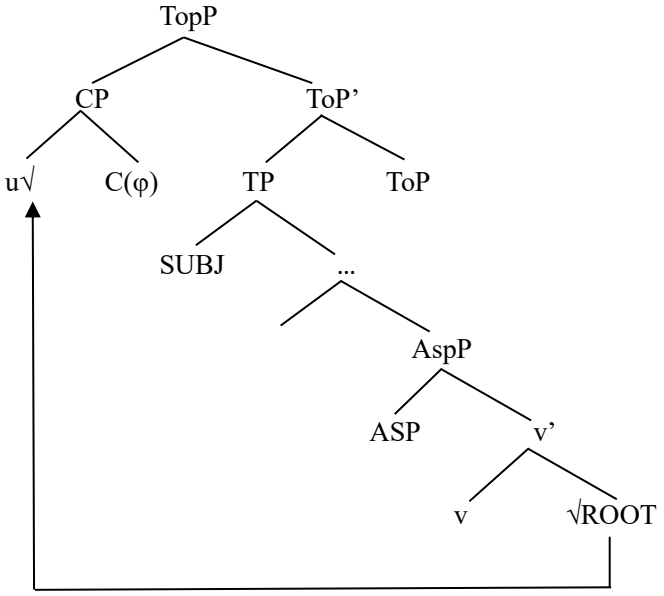
(Johns(2007) : 558)

本発表は Koening&Davis(2001)と Johns(2007)の考え方に基づき、中国語の動詞重複構文にもムードが存在すると仮定し、ROOT 移動によって動詞重複分裂文が生成されることを提案する。

（17）の構文の派生を（18）のように分析する。

(17) [Topic 吃],　我　是　[Focus 吃　过],　不过,…　（(1) 再掲）
　食べる　私　cop　食べ-exp　しかし
「私は食べることは食べたが…」

(18)



（18）は、C の位置に日本語の「こと/の」のように目に見えない名詞性を持つ補文化辞が埋め込まれており、ムードの Probe（u√）の要求でカテゴリーが決まっていない√ROOT が文頭に移動した後に、C によって名詞化されることを示している。v'の下に残された意味を持たない little v はアスペクトマーカーをサポートするために、発音しなければならない。したがって、動詞重複現象が起こると考えられる。

このような派生を仮定すると文頭の動詞はなぜ名詞性を持つのか、すなわち V_1 と V_2 の性質上のずれが説明できる。

また、単独の動詞だけではなく、(19a) のように目的語を伴って主題位置に生起する場合が存在する。ただし、この場合は後ろの V_2 に目的語が出現しない（19b）。

(19) a. [$_{Topic}$ 吃　　饭], 　我　　是　　吃过　　了， 　不过
　　食べる　ご飯　　私　　cop　食べる-exp　　perf　しかし
　　「ご飯を食べることに関して、私は食べたが…」
　b. *[$_{Topic}$ 吃　　饭], 　我　　是　　吃　　过　　饭　　了， 　不过……
　　食べる　ご飯　　私　　cop　　食べる-exp　ご飯　　perf　しかし
　　「ご飯を食べることに関して、私はご飯を食べたが…」

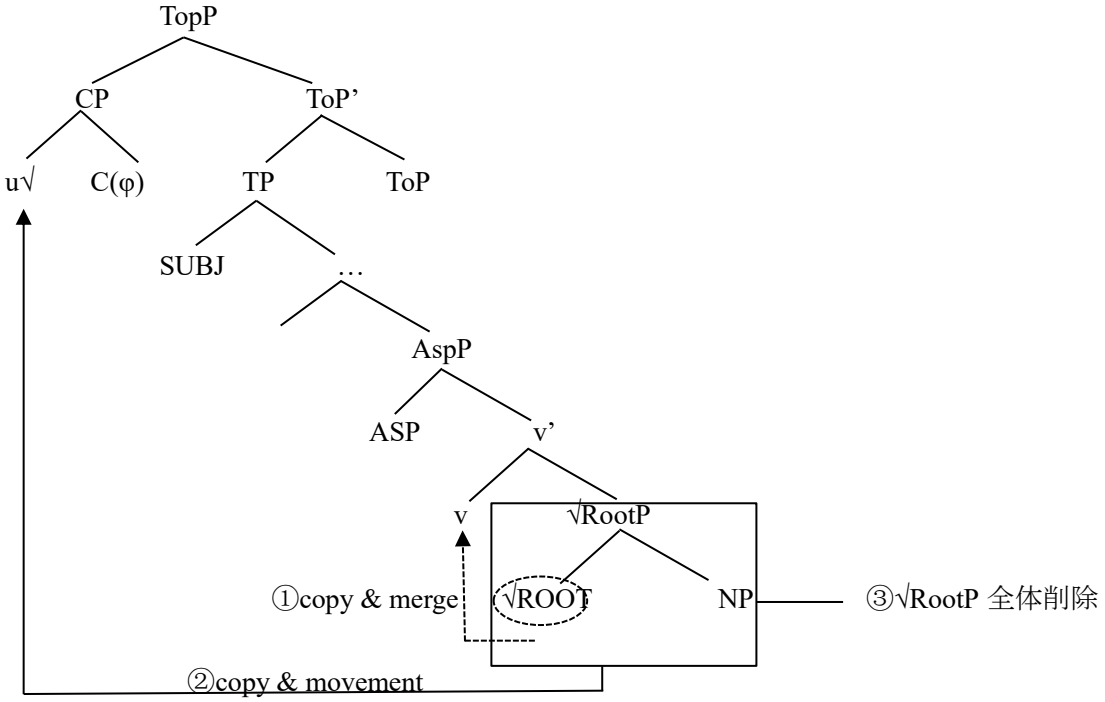
（19a）は、V_1 の後ろに目的語が出現するため、V_1 が動詞であることを示しているように見えるが、ここでの「饭（ご飯）」は特定な指示性を持たず、「吃饭（ご飯を食べる）」全体で「食事する」というイベント名詞句として見なされる。

さらに、V_1 の目的語位置には、（20）のように指示的代名詞が出現できない。これは、V_1 が動詞性を失い、名詞性を持つという分析を支持すると考えられる。

(20) a.*吃　　这　碗　饭　，　我　　是　　吃　　了。
　　食べる　この　杯　　ご飯　　私　　cop　　食べる　　perf
　　「この杯のご飯を食べることに関して、私は食べたが…」
　b.*看　　这本　　书，　　我　　是　　看　　了。
　　読む　　この　　本　　私　　cop　　読む　　perf
　　「この本を読むことに関して、私は読んだが…」

以上の分析に従い、（19a）の派生を（21）に示す。文頭に目的語を生起する場合、√ROOT 移動ではなく、√RootP という句を仮定し、√RootP 全体が移動すると考える。

(21)



（21）が示しているのは、まず、√ROOT がコピーを残して v に移動して併合し（①）、√RootP 全体が CP の指定部に移動して C によって名詞化される（②）。最後に、元位置に残された√RootP が削除される（③）。

５．まとめ

本稿は、Tsao(1987)の分析を踏まえて、中国語動詞重複分裂文における V_1 は動詞性が失われた要素であり、名詞性を持つことを示したうえで、Cheng & Vicente (2013)の動詞移動分析の問題点を指摘した。この問題を解決するために、Koening&Davis(2001)および Johns(2007)の分析に基づき、ROOT 移動仮説を新たな動詞重複のメカニズムとして提案した。それは、V_1 単独で文頭に現れる場合は√ROOT が移動し、目的語が伴う場合は√RootP 全体が移動するという分析である。単独で移動された√ROOT と全体で移動された√RootP はいずれも C によって名詞化されることで、V_1 と V_2 の性質の違いを主張した。

参考文献

Cheng, Lisa L.-S. 2008. Deconstructing the *shi…de* construction. *The Linguistic Review* 25: 235-266.

Cheng, Lisa L-S. and Luis Vicente. 2013. Verb doubling in Mandarin Chinese. *Journal of East Asian Linguistics* 22: 1-37.

Huang, C.-T. James, Audrey, Y.-H. Li, and Yafei Li. 2009. *The Syntax of Chinese*. Cambridge University Press.

Johns, Alana.2007.Restricting noun incorporation: root movement. *Natural Language & Linguistic Theory* 25:535-576

Koenig,J.-P. and Davis A.2001.Sublexical modality and the structure of lexical semantic representations. *Linguistics and Philosophy,* 24(1), 71–124.

Tsao, Feng-Fu.1987.On the so-called ‘verb-copying’construction in Chinese. *Journal of Chinese Language Teachers Association* 22: 13–44.